

琉球大学学術リポジトリ

研究室紹介（県農業試験場園芸支場花き研究室）

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017151

県農業試験場園芸支場花き研究室

沖縄県における花きの試験研究の歴史は古く、明治45年から実施されている。当時は主としてテッポウユリの球根栽培技術の研究がなされ、大正年間からは球根輸出も盛んになり、輸出農産物の重要な作物にまで成長したといわれている。

戦後本県が復帰するまでの間は、行政分離により県外へのあらゆる花き類の移出が植物防疫上の制約で移出困難になり、試験研究も県内消費を目的とした栽培試験を中心に行われた。その後昭和37年からにわかに県内でも花きの需要も増加し、これにともなって花き生産農家も増え、試験研究体制も1人体制から2人体制へと強化された。試験研究課題もこれまでの導入試作から、キクを中心とした品種導入試験、電照法試験などを実施して、昭和41年には始めて本県におけるキクの電照栽培基準を設定した。品種についても、天が原、乙女桜等を普及に移し、昭和50年頃まではこの品種がほとんどであった。また昭和44年からは、本県が本土復帰することを前提に、戦前移出実績の高かったテッポウユリの球根栽培の試験を実施し、昭和47年にはその栽培基準を設定し、品種についてひのもと、ジョージアの普及をはかった。また一方では県外移出切り花類として、キクを初めとしてグラジオラス、バラ等の試験も実施した。

昭和47年の復帰に伴って、行政的には農林水産省の助成によるテッポウユリの優良種苗生産事業施設が、園芸支場に設置され、種球のウイルスフリー化により産地への配布を行った。この事業にあわせて研究員も増員され、その頃から花き係は、研究員4名、現業職員3名体制で試験を実施し、球根ではテッポウユリ、フリージア、グラジオラス等の球根養成から促成栽培技術の研究を行い普及をはかった。また切り花類については、キクの露地2～3月出しの生産技術確立を目標に試験を実施し、適品種や栽培方法について普及へ

移した。更にキク以外に県外出荷可能な切り花類についても検討を行い、スターチス、紅花、ローダンセ、リアトリス、宿根カスミソウ等の県外出荷切り花としての栽培技術を解明し、普及へ移すと同時に昭和57年には、全国の宿根草花きの促成技術に関する諸問題の課題別検討会を、本県で開催するまでに至った。

以上のような花き試験研究を、花き研究室が設置されない以前から取り組みを開始し、昭和53年に農業試験場の組織改正によって、県農業試験場花き研究室となった。当初は研究室長1、研究員4、農業技術補佐員4名で研究を開始した。その頃からは研究施設の整備や備品等の整備も進み、キクについては更に産地化を拡大することを目的に、これまで他県で育成されてきた品種に依存してきたものを、本県育成のオリジナル品種を作出するため、イソギクとスプレーギクの交雑で従来の小ギクに比較して高伸長性で、同時開花性の沖の白波、沖の園、外8品目を昭和60年に普及へ移した。これらの品種はこれまで沖縄県の小ギクの代表品種として、多く作られるようになった。その後花きの品種育成が重要であるとのことで、新たに花き育種研究室が設置され、それに伴って花き研究室は室長1、研究員3、農業技術補佐員2の体制で研究を展開している。現在の研究課題は、① 国際化に対応すべくキクの効能率生産技術に伴う省力化技術の検討、② キクの周年供給体制をめざして夏秋ギクの生態解明と栽培技術の確立、③ デンファレ切り花の高品質生産技術のマニュアル化、④ 花きの更なる産地拡大をめざした新規花き定着化技術の確立である。

以上が当面の研究課題であるが、花きについては復帰後急速に生産拡大されたのに加えて、作目も多種多様で栽培技術も複雑なため、研究課題は山積している。これからも課題解決に向けて努力する所存である。

(阿 嘉 良 弘)